

# 木菟俗見

泉鏡太郎

青空文庫



苗賣なへうりの聲こゑは、なつかしい。

……垣かきの卵うの花はな、さみだれの、ふる屋やの軒のきにおとづれて、朝顔あしがほの苗なへや、夕顔ゆうがほの苗なへ……

またうたに、

……田舎あなかづくりの、かご花活はないけに、つつぷりぬれし水色みづいろの、たつたを活いけし樂たの

しさは、心こゝろの憂うさもどこへやら……

小うたの寄せ本よほんで讀よんだだけでも一寸意氣ちよつといきだ、どうして悪わるくない。が、四疊半よでふはんでも六疊ろくでふでも、琵琶びば柵だなつきの廣間ひろまでも、そこは仁體にんてい相應さうおうとして、これに調子てうしがついて、別嬪べつびんの聲こゑで聞きかうとすると、三味線さみせんの損料そんれうだけでもお安やすくない。白しろい手の指環ゆびわの税ぜいがかゝる。それに、われら式しきが、一念發起いちねんほつぎに及およんだほどお小遣こつかひを拂はいて、羅うすものつまの褌はたに、すつと長じゆばんの模様もやうが透すく、……水色みづいろの、色氣いろけは(たつた)で……斜なぐさめすわに座すわらせたところ、歌澤うたざはが何なんとかで、あのはにあるの、このはないのと、淺間あさまの灰はひでも降ふつたやうに、その取引とりひきたるや、なかくむづかしいさうである。

先哲せんてついはく……君子くんしはあやふきに近ちかよらず、いや頼杖ほづゑで讀よむに限かぎる。……垣かきの卵うの

花<sup>はな</sup> さみだれの、ふる屋<sup>や</sup>の軒<sup>のき</sup>におとづれて……か。

悪い<sup>わる</sup>ことは申<sup>まを</sup>さぬ。これに御<sup>ご</sup>同感<sup>どうかん</sup>の方<sup>かた</sup>々<sup>々</sup>は、三味線<sup>さみせん</sup>でお聞<sup>き</sup>きになるより、字<sup>じ</sup>でよ  
讀<sup>よ</sup>みになる方<sup>ほう</sup>が無<sup>む</sup>事<sup>じ</sup>である。――

下<sup>した</sup>町<sup>まち</sup>の方<sup>ほう</sup>は知<sup>し</sup>らない。江<sup>え</sup>戸<sup>ど</sup>のむかしよりして、これを東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>の晝<sup>ひる</sup>の時<sup>とき</sup>鳥<sup>とり</sup>ともい  
ひたい、その苗<sup>な</sup>賣<sup>へう</sup>の聲<sup>こゑ</sup>は、近<sup>ちか</sup>頃<sup>ころ</sup>聞<sup>き</sup>くことが少<sup>すく</sup>くなつた。偶<sup>たま</sup>にはくるが、もう以<sup>い</sup>前<sup>ぜん</sup>のや  
うに山<sup>やま</sup>の手<sup>て</sup>の邸<sup>やしき</sup>町<sup>まち</sup>、土<sup>ど</sup>べい、黒<sup>くろ</sup>べい、幾<sup>いく</sup>曲<sup>まが</sup>りを一<sup>ひと</sup>聲<sup>こゑ</sup>にめぐつて、透<sup>とほ</sup>つて、山<sup>さん</sup>王<sup>わう</sup>  
様<sup>さま</sup>の森<sup>もり</sup>に響<sup>ひび</sup>くやうなのは聞<sup>き</sup>かれぬ。

久<sup>ひさ</sup>しい以<sup>い</sup>前<sup>ぜん</sup>だけれども、今<sup>いま</sup>も覺<sup>おぼ</sup>えて居<sup>ゐ</sup>る。一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>は本<sup>ほん</sup>郷<sup>がう</sup>龍<sup>たつ</sup>岡<sup>をかち</sup>町<sup>やう</sup>の、あの入<sup>い</sup>組<sup>り</sup>んだ、  
深<sup>ふか</sup>い小<sup>こう</sup>路<sup>ち</sup>の眞<sup>まん</sup>中<sup>なか</sup>であつた。一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>は芝<sup>しば</sup>の、あれは三<sup>み</sup>田<sup>た</sup>四<sup>し</sup>國<sup>こく</sup>町<sup>まち</sup>か、慶<sup>けい</sup>應<sup>おう</sup>大<sup>だい</sup>學<sup>がく</sup>の裏<sup>うら</sup>と思<sup>おも</sup>  
ふ高<sup>たか</sup>臺<sup>だい</sup>であつた。いづれも小<sup>を</sup>笠<sup>がさ</sup>のひさしをすゑ、脚<sup>きゃ</sup>半<sup>はん</sup>を輕<sup>かる</sup>く、しつとりと、拍<sup>ひやう</sup>子<sup>し</sup>を  
ふむやうにしつゝ聲<sup>こゑ</sup>にあやを打<sup>う</sup>つてうたつたが……うたつたといひたい。私<sup>わたし</sup>は上<sup>じやう</sup>手<sup>うず</sup>の名<sup>め</sup>  
曲<sup>いき</sup>を聞<sup>き</sup>いたと同じ<sup>おなじ</sup>に、十<sup>じふ</sup>年<sup>ねん</sup>、十<sup>じふ</sup>五<sup>ご</sup>年<sup>ねん</sup>の今<sup>いま</sup>も忘<sup>わす</sup>れないからである。

この朝<sup>あさ</sup>顔<sup>がほ</sup>、夕<sup>ゆふ</sup>顔<sup>がほ</sup>に續<sup>つづ</sup>いて、藤<sup>ふぢ</sup>豆<sup>まめ</sup>、隱<sup>いん</sup>元<sup>げん</sup>、なす、さゞげ、唐<sup>たう</sup>もろこしの苗<sup>なへ</sup>、また胡<sup>き</sup>  
瓜<sup>うり</sup>、糸<sup>へちま</sup>瓜<sup>めい</sup>——令<sup>れい</sup>嬢<sup>ぢやう</sup>方<sup>がた</sup>へ愛<sup>あい</sup>相<sup>さう</sup>に(お)の字<sup>じ</sup>をつけて——お南<sup>たう</sup>瓜<sup>なす</sup>の苗<sup>なへ</sup>、……と、砂<sup>すなむ</sup>  
村<sup>ら</sup>で勢<sup>せい</sup>ぞろひに及<sup>およ</sup>んだ、一<sup>いつ</sup>騎<sup>き</sup>當<sup>たう</sup>千<sup>せん</sup>、前<sup>せん</sup>裁<sup>ざい</sup>の強<sup>つは</sup>物<sup>もの</sup>の、花<sup>はな</sup>を頂<sup>いた</sup>ぎ、蔓<sup>つる</sup>手<sup>たづ</sup>綱<sup>な</sup>、威<sup>を</sup>毛<sup>しげ</sup>

をさばき、よそほ装ひに濃こい紫を染などしたのが、夏なつの陽炎かげろふに幻影まぼろしを顯あらはすばかり、聲こゑで活いかして、大路小路おほちこうちを縫ぬつたのも中頃なかごろで、やがて月見草つきみさう、待まつよひ草ぐさ、くじやく草さうなどから、ヒヤシンス、アネモネ、チウリツプ、シクラメン、スエートパイ。笛ふえを吹ふいたら踊をどれ、何でも舶來はくらいものの苗なへを並ならべることに、尖端新語辭典モダンしんごじてんのやうになつたのは最近さいきんで、いつかざつ雑曲みだに亂みだれて來きた。

決けつして悪わるくいふのではない、聲こゑはどうでも、商賣しやうばいは道みちによつて賢かしこくなつたので、この初夏しよかも、二人ふたりづれ、苗賣なへうりの一組ひとくみが、下六番町しもろくばんちやうを通とほつて、角かどの有馬家ありまけの黒堀くろべいに、雁がんが歸かへるやうに小笠をかぎを浮うかして顯あらはれた。

——紅花べにばなの苗なへや、おしろいの苗なへ——特とくに註ちゆうするに及およぶまい、苗賣なへうりの聲こゑだけは、草くさ、花はなの名ながそのまゝでうたになること、波なみの鼓つづみ、松まつの調しらべに相あひひとしい。床とこの間まのもの、ぼたん、ばらよりして、缺摺鉢かけすりばち、たどんの空箱あきばこの割長屋わりながや、松葉まつばぼたん、唐辛子たうがらしに至いたるまで聲こゑを出だせば節ふしになる。むかし、下しもの句くに（それにつけても金かねの欲ほしさよ）と吟ぎんずれば、前句まへくはどんなでもぴつたりつく。（ほとゝぎすなきつるかたをながむれば）——（それにつけてもかねのほしさよ、）——一寸見本ちよつとみほんがこんなところ。古池ふるいけや、でも何なんでも構かまはぬ、といつた話はなしがある。もつともだ。うら盆ぼんで餘計身よけいみにしみて聞きこえるのと、卑さもしい

けれども、同じであらう。

その……

——紅花の苗や、おしろいの苗——

小うたなるかな。ふる屋の軒におとづれた。何、座つて居ても、苗屋の笠は見えるのだが、そこは凡夫だ、おしろいと聞いたばかりで、破すだれ越に乘だして見たのであるが、續いて、

——紅鶏頭、黄鶏頭、雁來紅の苗。……とさか鶏頭、やり鶏頭の苗——

と呼んだ。繪で見せないと、手つきや口の説明では、なか／＼形が見せられないのに、この、とさか鶏頭、やり鶏頭は、いひ得てうまい。……學者の術語ばなれがして、商賣によつて賢しである、と思つたばかりは二人組かけ合の呼聲も、實は玄米パンと、ちんどん屋、また一所になつた……どちやう、どちやう、どちやう——に紛れたのであつた。

こちらで氣をつけて、聞迎へるのでなくつては、苗賣は、雑音のために、どなたも、一寸氣がつかないかも知れぬと思ふ。

まして深夜の鳥の聲。

俳諧には、冬の季になつて居たはずだが、みづくは、春の末から、眞夏、秋も鳴く。……ともすると梅雨うちの今頃が、あの、忍術つかひ得意の時であらうも知れぬ。魔法、妖術、五月暗にふきはしい。……よひの間のホウ、ホウは、あれは、夜鷹だと思はれよ。のツホウホー、人魂が息吹をするとかいふ聲に、藍暗、紫色を帯して、のりすれ、のりほせのないのは木菟で。……大抵眞夜中の二時過ぎから、一時ほどの間を遠く、近く、一羽だか、二羽だか、毎夜のやうに鳴くのを聞く。寝ねがての夜の慰みにならないでもない。

陽氣の加減か、よひまどひをして、直き町内の大銀杏、ポプラの古樹などで鳴く事があると、梟だよ、あゝ可恐い。……私の身邊には、生にくそんな新造は居ないが、とに角、ふくろにして不氣味がる。がふくろの聲は、そんな生優しいものではない。――相州逗子に住つた時、秋もややたけた頃、雨はなかつたが、あれじみた風の夜中に、破屋の二階のすぐその欄干と思ふ所で、化けた禪坊主のやうに、喝をくはしたが、思はず、引き息で身震ひした。唐突に犬がほえたやうな凄まじいものであつた。

だから、ふくろの聲は、話に聞く狼がうなるのに紛れよう。……みづくの方は、木精が戀をする調子だと思へば可い。が、いづれ魔ものに近いのであるから、又ばける、といはれるのを慮つて、内々遠慮がちに話したけれども、實は、みづくは好きである。第一形が意氣だ。——聞、いや、寢床の友の、——源語でも、勢語でもない、道中膝栗毛を枕に伏せて、どたりとなつて、もう鳴きさうなものだと思ふのに、どこかの樹の茂りへ顯はれない時は、出来るものなら、内懐に隻手の印を結んで、屋の棟に呼びたい、と思ふくらゐである。

旅行をしても、この里、この森、この祠——どうも、みづくがゐさうだ、と直感すると、果して深更に及んで、ぽつと、顯はれ出づるから則ち話せる。——のツほ——ほう、ほつほウ。

「おいでなさい、今晚は。……」  
 つい先月の中旬である。はじめて外房州の方へ、まことに緊縮な旅行をした、その時——

待て、旅といへば、内にゐて、哲理と岡ぼれの事にばかり凝つてゐないで、偶には外へ出て見たがよい。よしきり（よし原すゞめ、行々子）は、麥の蒼空の雲雀より、野趣横



ういつ 溢して親しみがあつた。前にいつたその逗子の時分は、裏の農家のやぶを出ると、すぐ田越川の流れの續きで、一本橋を渡る所は、たゞ一面の蘆原。満潮の時は、さつと潮してくる浪がしらに、虎斑の海月が乗つて、あしの葉の上を泳いだほどの水場だつたが、三年あまり一度もよしきりを聞いた事……無論見た事も無い。

後に、奥州の平泉中尊寺へ詣つたかへりに、松島へ行く途中、海の底を見るやうな岩の根を抜ける道々、傍の小沼の蘆に、くわらくわいち、くわらくわいち、ぎやう、ぎやう、ぎやう、ちよつ、ちよつ、ちよつ……を初音に聞いた。

まあ、そんなに念いりにいはないでも、凡鳥の勘左衛門、雀の忠三郎などより、鳥でこのくらゐ、名と聲の合致したものは少からう、一度もまだ見聞きした覚えのないものも、聲を聞けば、すぐ分る……

ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし。

もしく、久保田さん、と呼んで、こゝで傘雨さんにお目にかゝりたい。これでは句になりませんまいか。

ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし。

顔と腹を横に揺つて、万ちゃんの「折合へません」が目に見える。

加賀の大野、根生の濱を歩行いた時は、川口の洲の至る所、蘆一むらさへあれば、行  
 々子の聲が渦を立てた、蟻の居る渚に寄れば、さらくと袖ずれの、あしのもとに、幾  
 十羽ともない、くわらくわいち、くわらくわいち、ちよツ、ちよツで。ぬれ色の、うす  
 紅らんだ莖を傳ひ、水をはねて、羽の生えた鮒で飛回る。はらくと立つて、うしろの  
 葦屋の梅に五六羽、椿に四五羽、ちよツちよツと、旅人を珍しさうに、くちばしを向け  
 て共音にさへづつたのである。——なじみに成ると、町中の小川を前にした、旅宿の背  
 戸、その水のめぐる柳の下にも来て、朝はやくから音信れた。  
 ……次手に、おなじ金澤の町の旅宿の、料理人に聞いたのであるが、河蟬は齧を  
 恐れない。寧ろ知らないといつても可い。庭の池の鯉を、大小計つてねらひにくるが、  
 仕かけさへすれば、すぐにかゝる。また、同國で、特産として諸國に貨する、鮎  
 釣の、あの蚊針は、すごいほど彩色を巧に昆虫を模して造る。針の稱に、青柳、  
 女郎花、松風、羽衣、夕顔、日中、日暮、螢は光る。(太公望)は諷する如くで、  
 殺生道具に阿彌陀は奇なり。……黒海老、むかで、暗がらす、と不氣味になり、黒  
 虎、青蜘蛛とすごくなる。就中、ねうちものは、毛巻におしどりの羽毛を加工する  
 が、河蟬の羽は、職人のもつとも欲するところ、特に、あの胸毛の火の燃ゆる緋は、

魔まの如ごとく魚うをを寄よせる、といつて價あたひを選えらばないさうである。たゞ斷ことわつて置おくが、その搖ゆるる篝か火りびの如ごとき、大紅玉だいこうぎよくを抱いだいた彼かのをんなは、四時しじともに殺生禁斷せつしやうきんだんのはずである。

さて、よしきりだが、あのおしやべりの中に、得えもいはれない、さびしい情じやうの籠こもつたのがうれしい。いふまでもなく番町邊ばんちやうあたりでは、あこがれる蛙かへるさへ聞きかれぬ。どこか近き郊こうへ出でたら、と近ちかまはりで尋たづねても、湯屋ゆやも床屋とこやも、釣つりの話はなしで、行々ぎやう子こなどは對手あひてにしない。ひばり、こま鳥こどり、うぐひすを飼かふ町内ちやうない名代なだいの小鳥こどりずきも、一いつ向かう他人たにんあつかひで對手あひてにせぬ。まさか自動車じどうしやで、ドライブして、搜さがして回まはるほどの金かねはなし……縁えんの切きれめか、よし原はらすゞめ、當分たうぶんせかれたと斷念あきらめて居あると、當年たうねん五月ごごわつ——房州ぼうしうへ行いつた以前いぜんである。

馬鹿ばかの一ひとつ覺おぼえ、といふのだらう。あやめは五月ごごわつと心得こころえた。一度いちど行いつて見みようで、まだ出でかけた事ことのない堀切ほりきりへ……急いそぎぎ候からふほどに、やがて着つくと、引ひきぞ煩わづらはぬいづれあやめが、憚はづかりながら葉はばかりで伸のびて居あた。半出はんでき來きの藝妓げいしや——淺草あさくさのなにがしと札ふだを建たてた——活人形いきにんぎやうをのぞくところを、唐突だしぬげに、くわらく、くわら、と蛙かへるに高笑たかわらひをされたのである。よしよしそれも面おも白しろい。あれから柴しば又またへお詣まゐりしたが、河かは甚じんの鰻うなぎ……などと、贅ぜいは言いはない。名物めいぶつと聞きく切干きりぼし大根だいこんの甘あまいにほひをな

つかしんで、手製ののり巻、然も稚氣愛すべきことは、あの渦巻を頬張つたところは、飲友達のみともたちは笑はば笑へ、なくなつた親どもには褒美ほうびに預あつからうといふ、しをらしさのおかげかして、鴻こうの臺だいを向むうに見みる、土手どてへ上あると、鳴なく、鳴なく、鳴なくぞ、そこに、よしきり。巢立すだちの頃ころか、羽音はおとが立たつて、ひらくと飛交とびかはず。

あしの根ねに近ちかづく、またこの長汀ちやうてい、風かせさわやかに吹通ふきとほして、人影ひとかげのないもの閑しづかさ。足音あしおとも立たつたのに、子供こどもだらう、恐れ氣おそもなく、葉先はさきへ浮うだし、くちばしを、ちよんと黒くろく、顔かほをだして、ちよ、ちよツ、とやる。根ねに潜ひそんで、親鳥おやどりが、けたましく呼よぶのに、親おやの心こころ、子知こしらずで、きよろりとしてゐる。

「おつかさんが呼よんでるぢやないか。葉はの中なかへ早はやくお入はり——人間にんげんが居ゐて可恐こはいよ。」

「人間にんげんは飛とべませんよ、ちよツ、ちよツ、ちよツ、ちよツちよツ。」

「犬いぬがくるぞ。」

「をぢちやんぢやあるまいし……」

やゝ長ながめな尾ををびよんと刎はねた——こいつ知しつて居ゐやあがる。前後ぜんご左右さいう、たゞ犬いぬは出でしまいかと、内々ないくびくくもので居ゐる事ことを。

「犬いぬなんか可恐こはくないよ。ちツちツちツ。」

畜生め。

「これく一坊や、一坊や、くわらかいち、くわらかいち。」

それお母さんが叱つて居る。

可愛いこの一族は、土手の續くところ、二里三里、蘆とともに榮えて居る喜ぶべきこ

とを、日ならず、やがて發見した。——房州へ行く時である。汽車が龜戸を過ぎて

——あゝ、このあひだの堤の續きだ、すぐに新小岩へ近つくと、窓の下に、小兒が溝

板を驅けだす路傍のあしの中に、居る、居る。ぎやうぎやうし、ぎやうぎやうし。

「をぢさんどこへ。……」

と鳴いて居た。

白鷺が——私はこれには、目覺むるばかり、使つて居た安扇子の折目をたゝむまで、

えりの涼しい思ひがした。嘗て、ものに記して、東海道中、品川のはじめより、大

阪まはり、山陰道を通じて、汽車から、婀娜と、しかして、窈窕と、野に、禽類

の佳人を見るのは、蒲田の白鷺と、但馬豊岡の鶴ばかりである、と知つたかぶりして、

水上さんに笑はれた。

「少しお歩行きなさい、白鷺は、白金（本家、芝）の庭へも來ますよ。」ついで小岩か

いちかはあひだひだりすのでん  
 ら市川の間に、左の水田に、すらくと三羽、白い棲を取つて、雪のうなじを細りとたゞずんで居たではないか。

のみならず、汽車が千葉まはりに譽田……を過ぎ、大網を本納に近いた時は、目の前へなはしろだ、二羽銀翼を張つて、田毎の三日月のやうに飛ぶと、山際には、つらくと立並んで、白い燈のやうに、青葉の茂みを照すのをさへ視たのである。

目的の海岸——某地に着くと、海を三方——見晴して、旅館の背後に山がある。上に庚申のほこらがあると聞く。……町並、また漁村の屋根を、隨處に包んだ波

状の樹立のたゞずまひ。あの奥遙に燈明臺があるといふ。丘ひとつ、高き森は、御堂があつて、姫神のお庭といふ。丘の根について三所ばかり、寺院の棟と、ともにそ

びえた茂りは、いづれも銀杏のこずゑらしい。

……と表二階、三十室ばかり、かぎの手にづらりと並んだ、いぬゐの角の欄干にもたれて見まはした所、私の乏しい經驗によれば、確にみづぐくが鳴きさうである。思つたばかりで、その晩は疲れて寝た。が次の夜は、もう例によつて寝られない。刻と、巻たばこを枕元の左右に、二嬌の如く侍らせつゝも、この煙は、反魂香にも、夢にもならない。とぼけて輪になれ、その輪に耳が立つてみづぐくの影になれ、と吹かしてゐる

と、五月やみが屋を壓し、波の音も途絶ゆるか、鐘の音も聞こえず、しんとする。  
 刻限、到限。

——のツ、ほッほウ——

「あゝ、おいでなさい。……今晩は。」

となりの隣の間の八畳に、家内とその遠縁にあたる娘を、遊びに一人預かつたのと、ふすまを並べてゐる。兩人の裾の所が、床の間横、一間に三尺、張だしの半戸だな、下が床張り、突當りがガラス戸の掃だし窓で、そこが裏山に向つたから、丁どその窓へ、松の立樹の——二階だから——幹がすくくと並んでゐる。枝の間を白砂のきれいな坂が畝つて抜けて、その丘の上に小學校がある。ほんの抜裏で、ほとんど學校がよひのほか、用のない路らしいが、それでも時々人通りがある。——寝しなに女連のこれが問題になつた。ガラスを通して、ふすまが松葉越しに外から見えよう。友禪を敷いた鳥の巢のやうだ。あら、裾の方がくすぐつたいとか、何とかで、娘が騒いで、まづ二枚折の屏風で圍つたが、尚隙があいて、燈が漏れさうだから、淡紅色の長じゆばんを衣桁からはづして、鹿の子の扱帯と一所に、押つくねるやうに引かけて塞いだのが、とに角一寸媚めかしい。

魔ものの鳥が、そこを、窓をのぞくやうに鳴いたのである。——晝見た、坂の砂道には、青すすき、蚊帳つり草に、白い顔の、はま晝顔、目ぶたを薄紅に染たのなどが、松をたよりに、ちらちらと、幾人も花をそろへて咲いた。いまその露を含んで、寝顔の唇のやうにつぼんだのを、金色のひとみに且つ青く宿して……木菟よ、鳴く。

が、鳥の事はいはれない。今朝、その朝、顔を洗つたばかりの所、横縁に立つた娘が、「まあ容子のいゝ、あら、すてきにシヤンよ、をぢさん、幼稚園の教員さんらしいわ。」

「おつと來たり。」

「お前さんお茶がこぼれますよ。」

「知つてる。」と下に置けばいゝものを、満々とあるのを持ちかへようとして沸き立つて居るから振りこぼして、あつゝ。「もうそつちへ行くわ、靴だから足が早い。」

「心得た。」

下のさか道の曲れるを、二階から突切るのは河川の彎曲を直角に、港で船を扼するが如し、諸葛孔明を知らないか、とひよいと立つて件の袋戸だなの下へ潜込む。「それ、頭が危いわ。」

「合點だ。」といふ下から、コツン。おほゝゝほ。「あゝ残念だ、後姿だ。いや、えり脚が白い。」

「といふ所を、シヤンに振向かれて、南無三寶。向直らうとして、又ゴツン。おほほほ。……で、戸だなを落した喜多八といふ身ではひだすと、

「あの方ね、友禪のふる敷包を。……かうやつて、少し斜にうつむき加減に、」



とおなじ容子ようすで、ひぢへ扇子せんすの、扇子せんすはなしに、手つきてで袖そでへ一寸舞振まひぶり。……娘むすめの舞振まひぶりは、然さることだが、たれかの男振をとこぶりは、みづくより苦にが々しい。はツはツはツはツ。

叱しつ！……これ丑満時うしみつときと思おもへ。ひとり笑わらひは怪ばけものじみると、獨ひとりでたしなんで肩かたをすくめる。と、またしんとなる。

——のツほツほ——五聲いつごゑばかり窓まじで鳴ないて、しばらくすると、山やまさがりに、ずつと離はなれて、第一だいいちの寺てらの銀杏いてふの樹きと思おもふあたりで、聲こゑがする。第二だいにの銀杏いてふ——第三だいさんへ。——やがて、もつとも遠とほくかすかになるのが——峰みねの明みやうじん神もりの森もりであつた。

東京とうきやう——番町ばんちやう——では、周圍しうゐの廣ひろさに、みづくの聲こゑは南北なんぼくにかはつても、その場所ばしよの東西とうざいをさへわきまへにくい。……こゝでは町まちも、森もりも、ほとんど一浦ひとつらのなぎさの盤ばんにもるが如ごとく、全幅ぜんぷくの展望てんぱうが自由じゆうだから、瀬せも、流ながれも、風かせの路みちも、鳥とりの行ゆくへ方も知しれるのである。又禽類またきんるゐの習性しふせいとして、毎夜まいよ、おなじ場處ばしよ、おなじ樹きに、枝えだに、かつ飛とび、かつ留とまるものださうである。心得こころえて置く事ことで……はさんでは棄すてる蛇へびの、おなじ場所ばしよに、おなじかま首くびをもたげるのも、敢あへて、咒詛じゆそ、怨をんりやう靈れい、執念しふねんのためばかりではない事ことを。

……こゝに、をかきな事がある。みづくのあとへ鼠が出る。蛇のあとでさへなければ  
 可い。何のあとへ鼠が出て、ちつとも差支はないのであるが、そのみづくが窓を  
 離れて、第一のいてふへ飛移つたと思ふ頃、おなじガラス窓の上の、眞片隅、ほと  
 んど鋭角をなした所で、トン、と音がする。……續いて、トン、と音がする。女二人の  
 眠つた天井裏を、トコ、トン、トコ、トン、トコ、トン、トコ、トン。はゝあ鼠だ。  
 が、大げさではない、妙な歩行きかただ、と、誰方も思はれようと考へる。  
 お互に——お互は失禮だけれど、破屋の天井井を出てくる鼠は、忍ぶにしろ、荒  
 れるにしろ、音を引ずつて回るのであるが、こゝのは——立つて後脚で歩行くらしい。  
 はてな、じつと聞くと、小さな麻がみしもでも着て居さうだ、と思ふうち、八疊に、私  
 の寝た上あたりで、ひつそりとなる。一呼吸抜いて置いて、唐突に、ぱりくぱりく、  
 びしり、どゞん、廊下の雨戸外のトタン屋根がすさまじく鳴響く。ハツと起きて、廊  
 下へ出た。退治る氣ではない、迷路を搜したのである。  
 屋根に、忍術つかひが立つたのでも何でもない。それ切で、第二の銀杏にみづく  
 の聲が冴えた。

更に人間に別條はない。しかし、おなじ事が三晩續いた。刻限といひ、みづく

の窓をのぞくの中から、飛移るあとをためて、天井の隅へトン、トコ、トン、トコ、トン——三晩めは、娘も家内も三人起き直つて聞いたのである。が、びりく、がらん、どん、としても、もう驚かない。何事もないとすると、寢覺めのつれ／＼には面白し、化鼠。

どれ、これを手づるに、鼠をゑさに、きつね、たぬき、大きいへば、千倉ケ沖の海坊主、幽霊船でも釣ださう。

如何に、所の人はわたり候か。——番頭を呼だすも氣の毒だ。手近なのは——閑静期とかで客がないので、私どもが一番の座敷だから——一番さん、受持の女中だが、……そも／＼これには弱つた。

旅宿に着いて、晩飯と……お魚は何ういふものか、と聞いた、のつけから、「銀座のバーから来たばかりですからねえ。」——「姉さん、向うに見える、あの森は。」「銀座のバーから来たばかりですからねえ。」うつかりして「海へは何町ばかりだえ。」「さあ、銀座のバーから来たばかりですからねえ。」あゝ、修業はして置く事だ。人の教へを聞かないで、銀座にも、新宿にも、バーの勝手を知らないから、旅さきで不自由する。もつとも、後に番頭の陳じたところでは、他の女中との詮衡上、花番

とかに當つたからださうである。が、ぶくりとして、あだ白い、でぶくと肥つた肉貫  
 ——(間違へるな、めかたでない、)——肉感の第一人者が、地響を打つて、外  
 房州へ入つた女中だから、事が起る。  
 たしか、三日目が土曜に當つたと思ふ。ばらくと客が入つた。中に十人ばかりの一  
 組が、晩に藝者を呼んで、箱が入つた。申兼ねるが、廊下でのぞいた。田舎づくり  
 の籠花活に、一寸(たつた)も見える。内々一聲ほととぎすでも聞けようと思ふと、  
 何うして……いとが鳴ると立所に銀座の柳である。道頓堀から糸屋の娘……女朝  
 日奈の島めぐりで、わしが、ラバさん酋長の娘、と南洋で大氣焰。踊れ、踊れ、  
 と踊り回つて、水戸の大洗節で荒れるのが、残らず、銀座のバーから來た、大女  
 の一人藝で。……酔つた、食つた、うたつた、踊つた。宴席どりの空部屋へ轉げ込  
 むと、ぐたりと寝たが、したゝか反吐をついて、お冷水を五杯飲んだとやらで、ウイーと  
 受持の、一番さんへ床を取りに來て、おや、旦那は酔つて轉げてるね、おかみさん、  
 つまんで布團へ載つけなさいよ。枕もとの煙草盆なんか、娘さんが手傳つてと、……あ  
 ゝ、私は大儀だ。「はい。」「はい。」と女どもが、畏まると、「翌日は又おみおつけ  
 か。オムレツか、オートミルでも取ればいゝのに。ウイ……」廊下を、づしづしと歩行きか

けて、よたくと引返し「おつけの實は何とかいったね。さう、大根か。大根、大根、大根でセー」と鼻うたで、一つおいた隣座敷の、男の一人客の所へ、どしどしどしん、座り込んだ。「何をのんびりしてるのよ、あはゝゝは、ビールでも飲まんかねえ。」前代未聞といツつべし。

宴會客から第一に故障が出た、藝者の聲を聞かないさきに線香が切れたのである。女中なかまが異議をだして、番頭が腕をこまぬき、かみさんが分別した。翌日、鴨川とか、千倉とか、停車場前のカフエーへ退身、いや、榮轉したさうである。寧ろ痛快である。東京うちなら、郡部でも、私は訪ねて行つて、飲まうと思ふ。

といつたわけで……さしあたり、たぬきの釣だしに間に合はず、とすると、こゝに當朝日新聞のお客分、郷土學の總本山、内々ばけものの監査取しまり、柳田さん直傳の手段がある。直傳が行きすぎならば、模倣がある。土地の按摩に、土地の話を聞くのである。

「——木菟……木菟なんか、あんなものは……」

いきなり麻がみしもの鼠では、いくら盲人でも付合ふまい。そこで、寝ころんで居て、まづみづくの目金をさしむけると、のつけから、ものにしなない。

「直になりませんな、つかまへたつて食へはせずぢや。」

あつ氣に取られたが、しかし悟つた。……嘗て相州の某温泉で、朝夕ちつともすゞめが居ないのを、夜分按摩に聞いて、歎息した事がある。みんな食つてしまつたさうだ。「すゞめ三羽に鳩一羽といつてね。」と丁と格言まで出来て居た。それから思ふと、みづくを以て、忽ち食料問題にする土地は人氣が穩かである。

「からすの方がましぢやね、無駄鳥だといつても、からすの方がね、あけの鐘のかはりになるです、はあ、あけがらすといつてね。時にあなた方はどこですか。東京かね——番町——海水浴、避暑にくる人はありませんかな。……この景氣だから、今年は勉強ぢやよ。八疊に十疊、眞新しいので、百五十圓の所を百に勉強するですわい。」

大きな口をあけて、仰向いて、

「七八九、三月ですが、どだい、安いもんぢやある。」  
 家内が氣の毒がつて、

「たんと山やまがありますが、たぬきや、きつねは。」

「じよ、じようだんばかり、直ねが安やすいたつて、化物屋敷……飛とんでもない、はあ、え、たぬき、きつね、そんなものは鯨くじらが飲のんでしまつた、は、は。いかゞぢや、それで居ゐて、二階にかいで、臺だい所ところ一切いっさいつき、洗面所せんめんじよも……」

喟然きぜんとして私わたしは歎たんじた。人間にんげんは斯その徳とくによる。むかし、路次裏ろじうらのいかさま宗匠そうしやうが、

芭蕉ばせの奥おくの細道ほそみちの眞似まねをして、南部なんぶのおそれ山やまで、おほかみにおどされた話はなしがある。柳やなぎ

田たさんは、旅籠はたごのあんまに、加賀かがの金澤かなざはでは天狗てんぐの話はなしを聞きくし、奥州あうしう飯野川いひのがはの町まちで呼よんだのは、期せずして、同氏どうしが研究けんきうさるゝ、おかみん、いたこの亭主ていしゆであつた。

第一だいいち儼然げんぜんとして紹ろの紋付もんつきを着きたあんまだといふ、天てんの授さづくるところである。

みゝづくで食しよくを論ろんずるあんまは、容體ようたい倨然きよぜんとして、金貸かねかしに類るゐして、借家しゃくやの周旋しうせを強きやう要やうする……どうやら小金こがねでその新築しんちくをしたらしい。

女教員ぢよけういんさんのシヤンを覗のぞいて、戸とだなで、ゴツンの量りやうけん見みだから、これ、天てんの戒いましむる所ところであらう。

但たゞ、いさゝか自ら安やすんずる所ところがないでもないのは、柳田やなぎださんは、身みを以もつてその衝しやうに當あたるのだが、私わたしの方は間接かんせつで、よりに立つた格かくで、按摩あんまに上かみをもませて居ゐるのは家内かないで、

私は寝ころんで聞くのである。ご存じの通り、品行方正の點は、友だちが受合ふが、按摩に至つては、然も斷じて處女である。錢湯でながしを取つても、ぼんとうに肩を觸らせた事さへない。揉ほどの手つきをされても、一ちゞみに縮み上げる……といつただけでもくすぐつたい。このくすぐつたさを處女だとすると、つらく、惟るに、媒灼人をいれた新枕が、一種の……などは、だれも聞かないであらうか、なあ、みゝづく。…

鳴いて居る……二時半だ。……やがて、里見さんの眞向うの大銀杏へ來るだらう。みゝづく、みゝづく。苗屋が賣つた朝顔も、もう咲くよ。夕顔には、豆腐かな——茄子の苗や、胡瓜の苗、藤豆、いんげん、さゝげの苗——あしたのおつけの實は……

昭和六年八月



# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

初出：「東京朝日新聞 第一六二五六号〜第一六二六一号」東京朝日新聞社

1931（昭和6）年8月2日〜7日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「形」に対するルビの「かた」と「かたち」の混在は、底本の通りです。

※表題は底本では、「木菟《みづく》俗見《ぞくけん》」となっています。

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2017年10月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 木菟俗見

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>